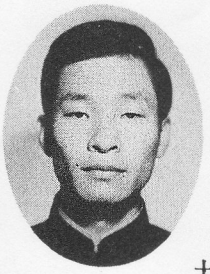
わたしの実習体験記

電波による地域開発を
―放送の現場に立って―

橋本泰三郎
（文学部広報学科四年）



私がFM東海で実習を始めたのは六月十八日。それから約二ヶ月半にわたっていろいろな仕事を手伝わせていただいた。私は小学校のころから放送というものに興味を持ちそれから約十年の学生生活の間、サークル活動を通じて、〃放送〃にたずさわってきた。そして大学に進学する時も、東海大学の広報学科を選び、一応学究的な立場で放送の研究をするようになった。そんなことから今度のFM東海での仕事は、今までの机上の知識を裏付ける意味においても、また矛盾点を考える意味においても非常に良い経験が出来たと思っている。

例えば、いわゆるマスコミには不可欠だといわれているフィード・バックの問題も、実際には三、四十人ぐらいの指定されたモニターからの報告と、それに時々行われる聴取率調査ということで、やはり何か心もとない感じがする。そのモニター報告も、中には時々ハッとさせられるものがあるが、多くはただ感想に終っているものが多く、これをとても一般的な意味と解釈出来ない。この実状を見て、その困難なことはわかるのだが、やはり出来るだけ多くの人達の批評がほしいものだと思った。私の手伝った番組で、試写会の案内を度々入れた。その度ごとに平均二百五十枚ほどのハガキが寄せられた。これも一種のフィードバックの役目を果たすことがある。しかしそれも多くは単なる感想に終ってしまっていて、批評の書いてあるものは非常に少ない。しかも、案内の中に「御意見、御希望も一緒に書いて下さい。」という言葉を入れてもである。ともかく、仕事にたずさわってみて、一番感じたことは、放送番組は、ただ送り手側だけが作るのではなく、受け手も一緒になって作られるべきものだと思った。

私がここで仕事をしている時、ちょうどFM東海の問題がもちあがった。ここでは、その政治的、法律的な問題は別として、この問題から、私は放送の内容、つまり報道、教育、教養、娯楽ということと、さらに、放送の機能、影響という問題を考えざるを得ないのである。郵政省の意向として、東京、大阪、名古屋等に近くFM放送の免許をおろすということで、しかもその多くは音楽専門局ということだそうだ。FM波の特徴から考えてみた時に、もちろん音楽に向いていることはいえる。しかしある意味で大きな影響力を持つ〃放送〃がはたして音楽のみに終ってしまっていいものだろうか。アメリカの場合は、ある地域で聴取可能の放送局が多いので、各専門局をつくることも出来ようが、それがはたして現在の日本にあてはまるとは思わない。地方へ行けば、民間放送局一局と、NHKのみしか聴取出来ないところも多い。この様な問題がある以上、内容を限定されてしまうということは、まだまだ時期が早いような気もする。電波が国民のものである以上、やはり地域開発が必要なのではないだろうか。勿論、将来は電波の特徴を十分に生かした内容が考えられていいと思う。

それはともかく、今までクラブ活動でも感じたことだが放送はよほど好きな人でなければ出来ないものだと改めて感じさせられた。なぜならば、番組制作も一つの芸術で、制作された作品が高く評価されるためには、常にそのものに情熱を持っていなければ出来ないからである。それと、これはドラマの場合にいわれることであるが、良い作品を作るためには、原作、脚色、演出、演技、音響と、この五拍子がそろわなければならないとまでいわれる。当然といえばそれまでだが、裏をかえしていうならば、それだけチームワークが大切だということがいえないだろうか。その意味で私の手伝った番組「キャンパス・アンド・ミュージック」はチームワークもとれ、毎日楽しく仕事が出来た。何回か仕事で遅くなったり、また徹夜したりしたこともあったが、このような苦しかったことも、今では非常に楽しく、また有意義な経験として思い出されるのである。